

「結び」一考察

A Study of "Knotting"

八倉巻 敬子

YAGURAMAKI Keiko

はじめに

「結び」とは紐状の素材使って物と物を繋ぐ、ゆわえ合わせるという意味がある。はるか太古の人は、この最も単純で原始的な技術を学ぶことによって毎日の生活を向上させていった。日本で出土した埴輪や飾りや刀剣などの紐から、飛鳥時代以前にも存在していたことがうかがえる。また、「結び」の確立によってはじめて狩猟や住居の建築、ものの運搬が可能となった。さらに記憶・標識・文字（情報の伝達）や信仰的役割など奥が深く、祭りや祈願行事に欠かせないシンボルとしても発達した。

今日の日常生活の中では、荷物を縛るロープ・靴紐・ネクタイ・水引・登山・救急包帯・料理・園芸・和装・釣り・風呂敷・髪結い・建築・仏具・締め飾りなどあらゆる場面で生活に浸透している。

そのような「結び」が、今日の科学技術の発達に、原子や分子のようなミクロの世界から宇

宙のようなマクロの世界までいろいろな科学的現象の中で発見され、「結び目理論」は約100年前から数学の研究分野の中「位置研究」の典型的な研究対象として、その基礎理論が形作られている。ここ10年くらいに急速に科学界においても重要性が認識されるようになってきた。本報では日本独自の「結び」について、歴史の中の服飾を中心に考察し、また西欧で発達した装飾結びの「マクラメ」について調べた。

(1) 日本の「結び」

1) 「結び」と信仰

「結び」の語源は「産^{むすび}霊」で、奈良時代には「ムスヒ」と発音した。「ムス」は生産の意「ヒ」は霊力とされ、語意は陰と陽とが一つに合わさり繋がって新しいものを創造するという意味がある。「縁^{えんむすび}産霊」は男女の結びつきをあらわす。産土神のシンボルである夫婦岩を繋ぐ注連縄（伊勢二見浦）は代表的な例である。縁結びに

やぐらまき けいこ (生活科学科)

よって生まれたムスビヒコ・ムスビヒメが現在
は息子・娘という言葉になっている。

「結び」は陰と陽、吉と凶、豊作祈願と地鎮
祭など我が国のさまざまな行事は、思想や信仰
と深くかかわりあいながら安全や多幸を祈り、
また呪術的な要素をも包含し発達したと思われ
る。

2) 装飾の中の「結び」

人間の衣生活は自然界の動植物から得た素材
を身につけることから始まり、衣服の起源は紐
衣（腰に巻いた1本の紐）にあると言われている。
身体の大切な部分である腰に紐を巻いて神
聖な部分である標識とし、病気やけがを引き起
こす悪霊が身体に入らないように、生き霊が身
体と遊離しないようにという呪術的な願いを込
めた。このように実用性と装飾性を兼ね備えて
いった紐はやがて帯となり、華やかな結びの文
化を創造していく。人々の服装の実態が比較的
に明らかになった飛鳥・奈良時代から現代の和
服が出来上がる江戸時代までを中心に特徴ある
結びについて検討してみた。

①埴輪からみる「結び」……古代の衣服形態
は上下二部形式で男女共上着は窄袖で、左前に
重ね上下で紐結びにし、いずれも「蝶結び」で
結んだ。男子は髪を美豆良みずらに結び、太いズボン
状の袴を履きひざの下で赤い紐を結ぶのが特徴
である。

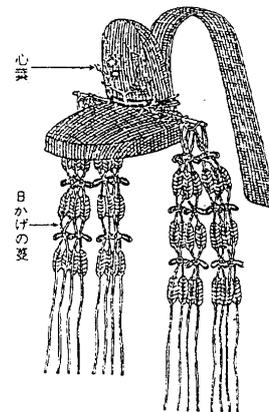
②位をあらわす「結び」……仏教の伝来とと
もに中国文化が衣服形態に多くの影響を与えた。
奈良時代には「衣服令」が発布され、日本では
じめて服制の成文化がなされ、正装には身分階
級別に色や結びの数などが詳細に決められた。
「蝶結び」をはじめ「総角結び」「菊結び」など
公服の正装には多くの紐が用いられた。

③公家社会と「結び」……平安時代になると
貴族文化が花開き、日本独自の文化を作り上げ

る。貴族階級の服装は、襟元や袖口などが美し
い装飾結びで飾られている。当時はボタンの代
用として、各種結びを用いた。男子の正装は、
束帯姿で「釈迦結び」や「総角結び」が代表的
な結びである。祭事の当事官は冠の飾りに「心
葉日陰鬘こころはひかげのかずら」をつける事が決まりであった。（図一
1参照）

このように冠の緒や装飾具の結びかたの違い
で階級の違いを表した。

女子の正装は十二単衣である。その衣の重ね
方は季節の色とりどりの配色を「襲色目」とし
て定着すると同時に、結びが衣服に多く用いら
れていた。その一例として当時の旅姿には、壺
装束つぼしょうぞくといわれるものがあり、市女笠をかぶりか
らむしの草の繊維で作った薄い布を下げ、白糸
で「総角結び」を結んだ紐を八本たらししてい
るのが特徴である。



図一 「心葉日陰鬘」

王朝貴族たちの邸宅である寝殿造りには屏風
や几帳がアクセントとして置かれ、二重棚など
の調度品には美しい紐で結ばれた文箱や鏡箱な
どが並べられ室礼の形を成していた。仏具にも
広く結びが使われ生活に深く浸透していったこ
とがうかがわれる。現代までに伝えられている
伝統的な装飾結び（水引も含み）この平安時代
にはほぼ出揃ったものと考えられる。

また、「花結び」は当時の和歌・習字・音楽

などと並んで、女性の教養の一つとして取り上げられていた。代表的な「花結び」を（20種類）実際に筆者が結んだものである（図-2）

- ① 淡路結び →水引で結ばれる儀式用，応用範囲は広く。あわび結びと同じ。
- ② 髪かざり結び →婚礼の慶事に多く用いられる。水引きでは真・行・草の3体がある。
- ③ 亀結び →平たく結んだ形が亀の背に似ていることからこの名がついた。
- ④ ^{あげまき}総角結び →結び目に人型と入型がある。武具の結びには人型が用いられる。
- ⑤ 菊結び →延命長寿のめでたい結び。京都の祇園祭りの鉾飾りに良く結ばれている。
- ⑥ 相生結び →相對した結び目がめでたいということで，尊ばれる。
- ⑦ かごめ結び→結び目が，かごの編み目になっている。厄よけの印に使われる。
- ⑧ 梅結び →梅の花形に結び，花結びの代表的なもの。被布や道中着の胸飾りに用いられる。
- ⑨ 几帳結び →几帳の結びに用いられる。

- ⑩ ^{けさ}架袷結び →僧衣の袷袷にかける修多羅結びのなかにある結び。
- ⑪ 叶結び →結び目の表が口の字，裏が十の字に結ばれ叶の字に読めるため。
- ⑫ 玉房結び →大輪の牡丹の花が開花した形を表現した結び。
- ⑬ 国結び →四角い国囲いの形のなかに，国という字を表現した結び。
- ⑭ 茗荷結び →茗荷に似ている。ボタンとしてよく使用される。
- ⑮ 釈迦結び →釈迦の頭のように凹凸が出来るのでこの名がついた。襟留めのボタンに使用。
- ⑯ 玉結び →釈迦結びを紐の途中で結んだ。
- ⑰ けまん結び →仏教と共に伝わり，仏の力によって幸福へ導くという結び。
- ⑱ ^{しょうごん}莊嚴結び →仏前を莊嚴にするための結びお寺の境内でよく見られる。
- ⑲ 唐蝶結び →蝶の形を表現したもの。
- ⑳ 網編み →船員がロープでよく結び，スクエア・マットとも呼ぶ。

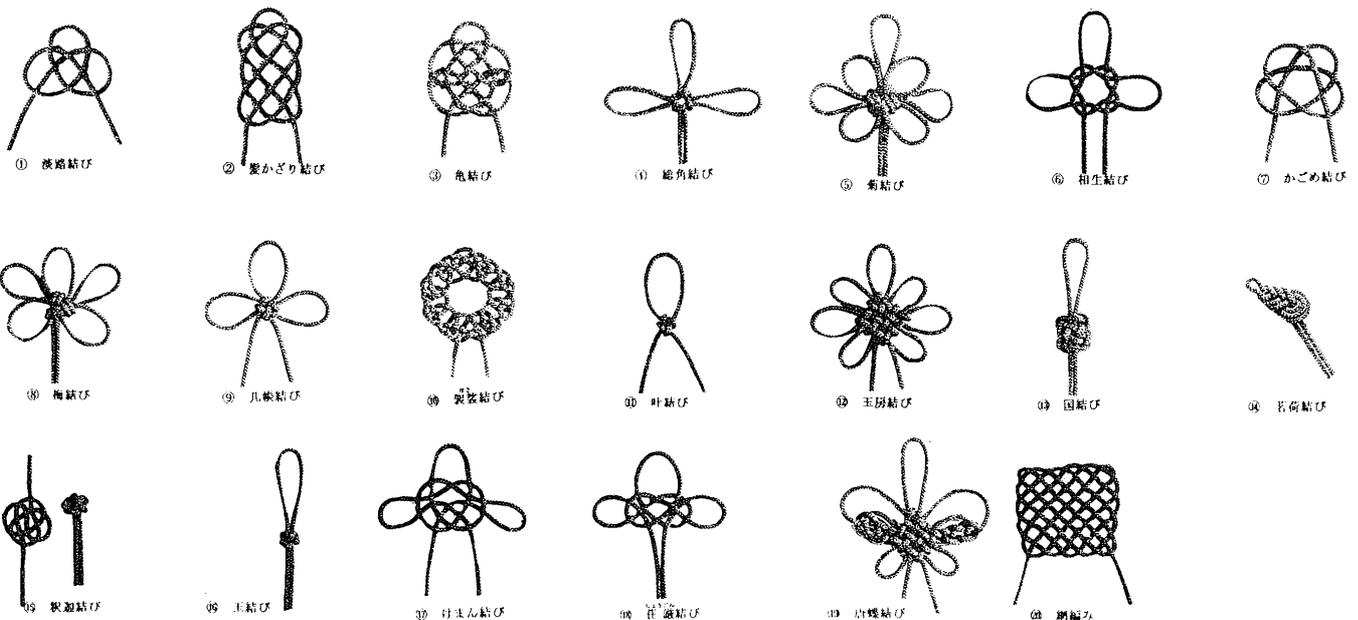


図-2 「花結び各種」

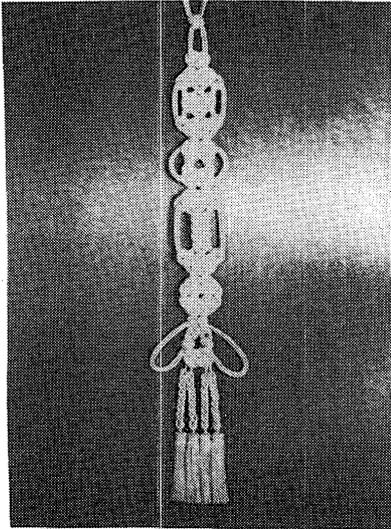


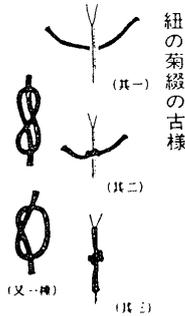
写真-1 「修多羅結び」

以上主な結びを紹介した。中でも特に、「修多羅結び」は仏教の伝来と共に伝えられた格式のある結びで、尊い経文が遠くに散らないため結び留めておくという意味が込められている。実際の葬儀の時には位の高い僧侶が僧衣の肩から掛ける結びとして、また遺体が納棺されて出棺されるまでひつぎの上に置かれるのもこの結びである。死人の魂が迷わないようにという願いから、お経が込められた結びで留めるといふ習慣が現在も行われている。(写真-1)

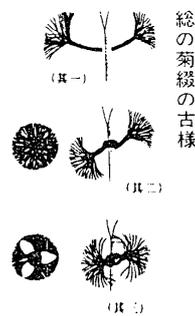
④武家社会と茶の「結び」……鎌倉時代に入ると貴族社会から武家社会へと変わり、武士が権力をにぎるようになる。服装も簡略化され直垂・水干には、蝶結びの胸緒と「菊綴」という飾りをつけた。菊綴は、その形がひらがなの「も」に似ていることから「もの字結び」と呼ばれた。衣服のほころびを防ぐための補強の綴紐であったのが、次第に装飾性が強まった。後に現在の紋付きの位置となる。(図-3)

室町時代になると武具の結び(鎧・兜・太刀など)が発達し、さらに能や狂言・お香・茶の湯が盛んになりそれに伴い実用と装飾を兼ねた多種多様な結びが考案された。なかでも茶道は戦国武将の教養と政略の一つになっていた。茶

菊綴の結び*



紐の菊綴の古様



総の菊綴の古様

公家の子弟や近侍の童が着用した水干。紐や菊綴など華麗に仕立てられているが、様式は大人の水干に同じ。菊綴は、胸に一カ所、背面・右左の袖の縫目に四カ所。いずれも二つ一組である。

童水干*

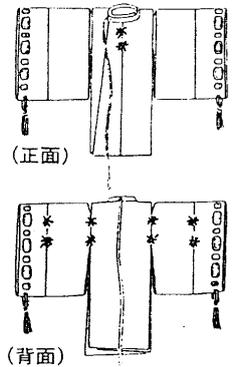


図-3 「菊綴じ・水干の前・後ろ」



写真-2 「茶入れの仕覆結び」

の湯が大成されると共に、茶道の作法に結びが定められた。例えば、茶入れを納める仕覆の口の緒には、長緒と短緒があり常に打留めといって端を結んである。主君の毒殺を防ぐため、茶入れの仕覆の緒は飾り結びで、封印することにより当時は鍵の役目をしていたと考えられる。(写真-2) また、訶梨勒かりろくは、その実が薬用にされていたことで、「邪気を払う具」として柱に掛けられた。現在では、名物裂などで訶梨勒の形を作りそのなかにお香を入れ、色々な飾り結びをしてお茶席に用いられている。

(写真-3)

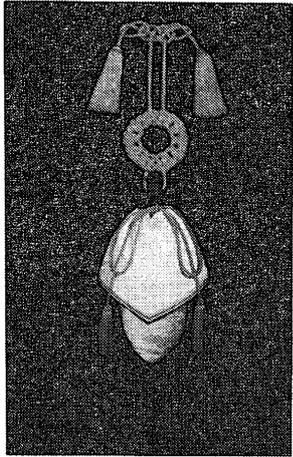


写真-3 「詞梨勒」

⑤江戸時代の帯「結び」……江戸時代になると、華やかな町人文化が隆盛となる。服装の中で極端に変化し発達したのは女の帯結びである。桃山時代になると小袖を表着として着流スタイルが定着した。帯は前・横・後ろなど自由に結んでいて素朴な装いであった。帯は組帯と平紵帯が多く用いられた。平紵帯は幅が約6cmで、表着の裂で仕立てたため狭いながらも豪華であった。江戸初期の帯幅は約10cm足らずで長さも2m余りであった。その後次第に、袖丈が長く

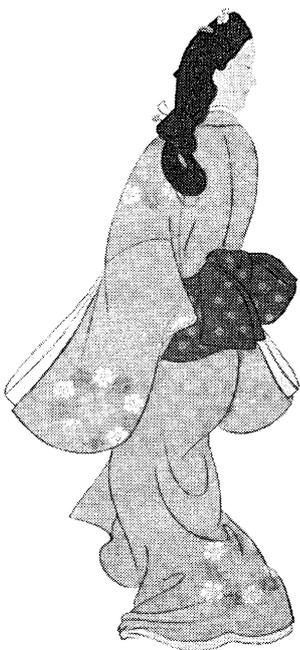


写真4 「見返り美人」

なるにつれ帯幅が幅広のものになっていった。江戸後期の帯幅は一尺（約40cm）長さは約4mにもなった。帯結びにも流行が見えはじめ、当時歌舞伎の女形で上村吉弥が舞台上で結んだところから女性の間で広まった結びは「吉弥結び」と呼ばれた。「見返り美人」……17世紀末元禄頃 菱川師宣筆（東京国立博物館埋蔵）（写真-4）吉弥結びを契機として幅・丈共に拡大した帯はますます巨大化し、様々な結びを生みだしていく。（写真-5）は「東西南北之美人」北尾重政筆（東京国立博物館埋蔵）で帯がひっかけ結びともいわれ一度結んだ布を二つ折りにして垂らすだけの結び方も見られる。

このように帯は様々に形づくられ巨大に発達し、帯結びの位置も変化していく。桃山時代の細帯では、結びは前・後ろ・横と自由であった。その後、帯幅が広くなり吉弥結びが考案された頃には、若い女性の間で後帯が流行していく。そして元禄頃には、若い女性の振り袖は後ろで帯を結ぶ。既婚者の留袖は、前で帯を結ぶという約束事ができていく。しかし帯幅が広く、長



写真-5 「東西南北之美人」

くなり結び方も簡単なものから複雑化してくるため、ついには帯留め・帯ヱを用いなければ締められなくなった。幕末になると帯あげが登場し、また既婚女性も後ろで結ぶのが普通になる。江戸時代に極端に発達した帯結びの背景には、社会生活との複雑なかかわりの中で、個性を存分に表現しようとする人の知恵が連綿と受け継がれていることがわかった。

(2) 西欧の「結び」

1) マクラメの歴史

西欧における装飾面の結びは、主に船員が用いるロープ結びから発達したとされている。海上の距離の単位となっているノット (knot) は結び目の意からつけられた。古くは船の速力を測るために、進行中の船から網にログ・チップという木片をつけて海上に投げると同時に砂時計を動かす。網には一定時間中、どれぐらいの結びがほぐれたかによって船の速力を測定した。

航海中に考案された各種結びは、次第に装飾的意味合いを濃くしながら寄港地から寄港地へと伝播した。外国との交易が盛んになった中世以降の発達にはめざましいものがある。

マクラメの語源はアラビア語の (migramah) ムグラムで、交差して紐を結びながら作るレー

スという意味がある。

マクラメと名がついたのは16世紀と言われ織物の端をまとめるためにそれを結び房飾りとして装飾を兼ねたのが始まりであった。

現在マクラメ (Macrame) として世界各地で親しまれている。

2) 帆船とマクラメ

平成12年10月16日から23日までの6日間富山新港北2号埠頭に奇港したおり、停泊中の運輸省航海練習帆船二代目『海王丸』が一般公開された。この写真は船内の通路に掲示されていた「結びの標本」である。このように様々な結びが紹介されていた。

(写真-6) (写真-7)

また帆船では、ホイッスルの合図ですべての動作が決まる。これもマクラメで結んだものを首から下げたようだ。帆船によって結びの複雑さやバリエーションが異なる。この「ラビサ」は船員が現在も使用している、チリ海軍の帆船エスメラルダ号のもので錨形に仕上げられているのが特徴である。以前は「ラビサ」の結びも各家族により模様の組み合わせが異なり(日本の家紋・アラン模様のようなもの) 海で遭難したとき、首から外れ流され浜に打ち上げられるのを見て誰の物かを判断した。(写真-8)

このように結びは命綱で安全な航海を遂行す

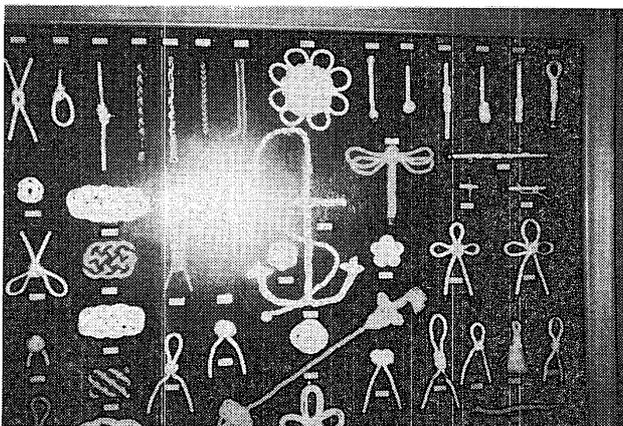


写真-6 「海王丸船内」

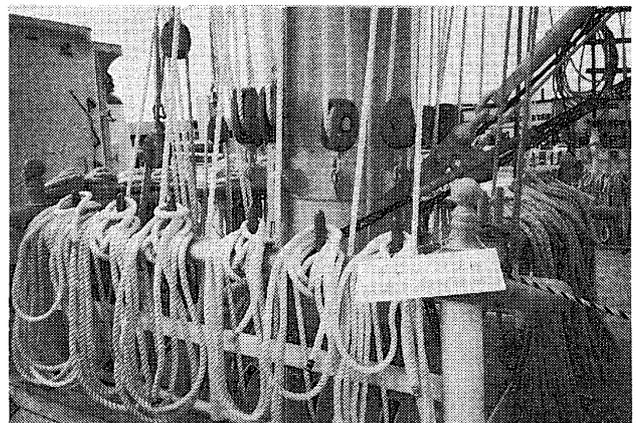


写真-7 「海王丸船上」

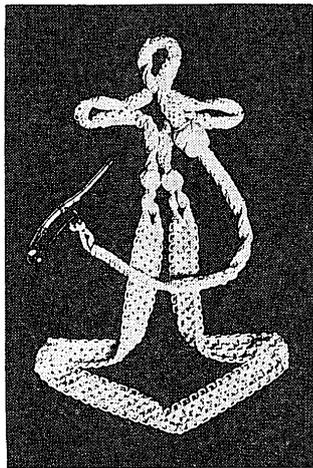


写真-8 「チリ海軍エスメラルダ号のラビザ」

るためには無くてはならないものとする。

3) 日常生活の中のマクラメ

日本にマクラメがどのように浸透していったのか、インターネットで検索してみた。奈良女子大学の画像原文データベースで電子画像化されている雑誌「家事及裁縫」(発行元:東京家事講習所)は昭和2年に創刊,第16巻(昭和17年)より「家事裁縫」とされ第19巻(昭和19年)より「家政教育」と誌名変更。戦後「家庭科教



写真9 「家事及裁縫 第一巻第六号(昭和2年9月号)」

育」(発行元:家政教育社)として後継され、引き続き現在も刊行中である。(写真-9)

その第一巻第六号(昭和2年9月号)の中で大妻大学学長大妻コタカが「マクラメ結びの電燈覆」を紹介している。日常生活が少しずつ洋風化されていくと同時にインテリア・バック・アクセサリ・ウェアから装飾品にいたるまで幅広く浸透していったことが推察される。

これは筆者が製作したタペストリーは、24種類の結びのサンプルである。

(写真-10)

上から1段目左より(・巻き結び・七宝結び・左右結び・芯交差ねじり結び・右上ねじり結び) 上から2段目左より(・平結びのピコット・玉結び・平結びの応用・左右結びの応用・タッチング) 上から3段目左より(・三編み・タッチングピコット・裏巻き結び・四つ編み・しゃこ結び) 上から4段目左より(・変わり七宝結び・とめ結び・あわじ結び・芯交差七宝結び・変わり平結び) 上から5段目左より(・斜め巻き結び・横巻き結び・1回半平結びの七宝結び) 上から6段目(四つだたみ結び) このようにマク

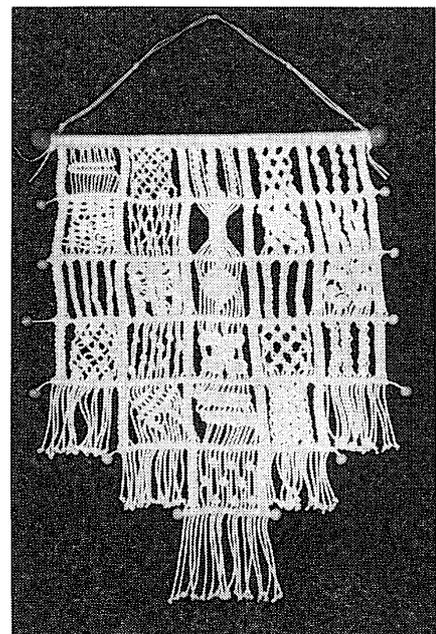


写真-10 「マクラメサンプル, タペストリー」

ラメにも様々な結びがある。それらを組み合わせ
て作品を製作する。

基本的な結びには Squire knot と Clove hitch
に大きく分けられる。

・ Square knot は 4 本 1 組で結ぶもので中 2 本
を芯糸にする。紐状のものも、平面や立体の
ものまで形作ることが出来る。(平結び・ねじり
結び・七宝結び)

・ Clove hitch は芯糸に他の糸を 1 本ずつ巻き
つけて結んでいく。(芯糸の方向により横巻き
結び・斜め巻き結び・縦巻き結び)

次に示す作品はポット・ハンガーで主に、
Square knot で結んだ。観葉植物を吊り下げる
もの。(写真-11)

* ドア・ベルは主に Clove hitch で結んだ。

(写真-12)

* アクセサリー各種は結びを組み合わせ
て結んだ。(写真-13)

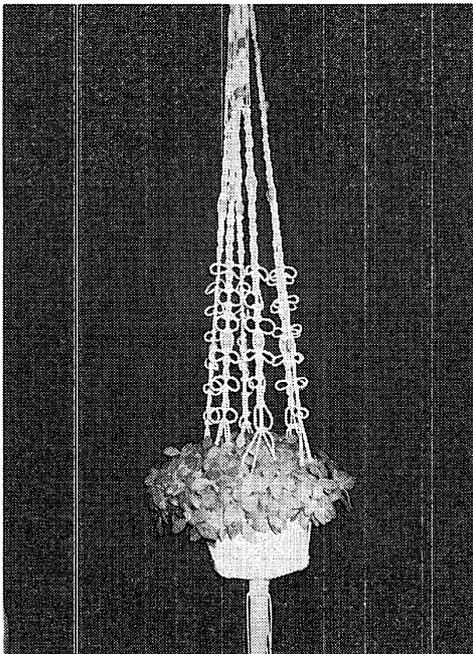


写真-11 「マクラメ・ポットハンガー」

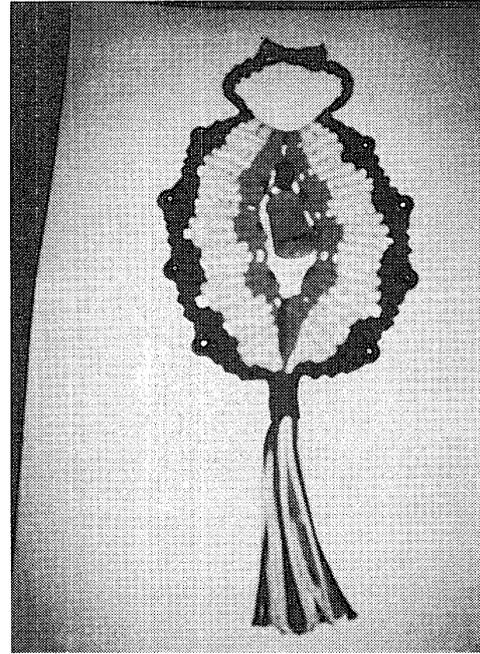


写真-12 「マクラメ・ドアベル」

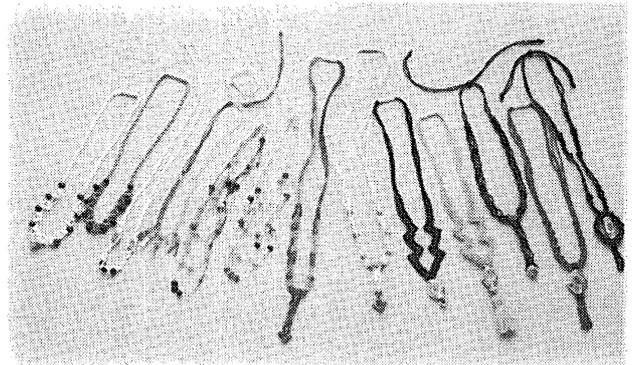


写真-13 「マクラメ・アクセサリー各種」

おわりに

結びの歴史をたどってみると、私たちが現在
用いている多種多様な結びは、長い歴史の中で
育まれて完成していった事がわかる。日本独自
の美意識の中で生まれた世界に類を見ない「花
結び」、西欧では航海する船員達の中で受け継
がれた「マクラメ」は、現在では若い人達の間
で、携帯電話のストラップやアクセサリーに多
く使用されている。

また「手は外にでた脳」と鈴木良次氏が明ら
かにしているように高齢者にとって、指先を動

かすことは、リハビリ治療の手段として欠かせないと報告がある。さらに、日本作業療法士協会編の教科書の中でリハビリテーション学科の科目名（基礎作業学）の中でマクラメが取り上げられているなど今後「結び」は単なる装飾品や実用品にとどまらず、リハビリ治療の一端としても発達していくと考えられる。ここで考察した結びはほんの一端でしかない。「結び」は生活のあらゆる場面に浸透し奥深いものである。私達人間の英知と考え、今後も研鑽を重ねていきたい。

<参考文献>

- ・「結び目理論概説」（WBRリコリッシュ著、村上齊他訳）シュプリンガーフェアラク東京 2000年
- ・「結び」岩田 巖 法政大学出版局 1994年
- ・「包み結びの歳時記」岩田 巖 福武書店 1991年
- ・「手の中の脳」鈴木良次 東京大学出版会 1996年
- ・「脳を鍛える」立花 隆 新潮社 2000年
- ・「生活造形」（結ぶ・編む・組む・織る・縫う）1995年 石井照子 建帛社
- ・「花結び」永井百合子 淡交社 1999年